

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 差用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)		スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ				
外用鎮痛・消炎薬																				
抗炎症成分	インドメタシン軟膏	インテパン軟膏	鎮痛作用・抗炎症作用を有する。急性炎症・慢性炎症に対し強い効力を示す。				0.1%~5%未満(そう痒、発赤、発疹)				本剤又は他のインドメタシン製剤に対して過敏症の既往歴 ・アスピリン喘息又はその既往歴(重症喘息発作の誘発)	・気管支喘息 ・感染を伴う炎症 ・妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、慢性疾患	感染を伴う炎症に用いる場合には感染症不顕性化	原因療法ではなく対症療法 慢性疾患(変形性関節症)では薬物療法以外の療法も考慮		妊婦又は妊娠している可能性のある婦人に対しては大量・広範囲に渡る投与をさける 眼及び粘膜に使用しない 表皮が欠損している場合に使用すると一時的にしみる、ヒリヒリ感 密封包装法での使用はしないこと			症状により、適量を1日数回患部に塗擦する。	下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎 変形性関節症、肩関節周囲炎、腱鞘炎、腱周炎、上腕骨上顆炎(テニス肘等)、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛
	インドメタシン貼付剤	カトレップ	鎮痛作用・抗炎症作用を有する。急性炎症・慢性炎症に対し強い効力を示す。				0.1%~5%未満(発赤、そう痒、発疹、かぶれ)	0.1%未満(ヒリヒリ感、腫脹)			本剤又は他のインドメタシン製剤に対して過敏症の既往歴 アスピリン喘息又はその既往歴(重症喘息発作の誘発)	・気管支喘息 ・感染を伴う炎症 ・妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児、慢性疾患	感染を伴う炎症に用いる場合には感染症不顕性化	原因療法ではなく対症療法 慢性疾患(変形性関節症)では薬物療法以外の療法も考慮		損傷皮膚及び粘膜、湿疹又は発疹の部位に使用しないこと。			1日2回患部に貼付する。	下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎 変形性関節症、肩関節周囲炎、腱鞘炎、腱周炎、上腕骨上顆炎(テニス肘等)、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛
	インドメタシン外用液	インテパン外用液	鎮痛作用・抗炎症作用を有する。急性炎症・慢性炎症に対し強い効力を示す。				0.1%~5%未満(そう痒、発疹、発赤)	0.1%未満(ヒリヒリ感、乾燥感、腫脹)			本剤又は他のインドメタシン製剤に対して過敏症の既往歴 アスピリン喘息又はその既往歴(重症喘息発作の誘発)	・気管支喘息 ・感染を伴う炎症 ・妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、慢性疾患	感染を伴う炎症に用いる場合には感染症不顕性化	原因療法ではなく対症療法 慢性疾患(変形性関節症)では薬物療法以外の療法も考慮		妊婦又は妊娠している可能性のある婦人に対しては大量・広範囲に渡る投与をさける 眼及び粘膜に使用しない 表皮が欠損している場合に使用すると一時的にしみる、ヒリヒリ感 密封包装法での使用はしないこと			症状により、適量を1日数回患部に塗布する。	下記疾患並びに症状の鎮痛・消炎 変形性関節症、肩関節周囲炎、腱鞘炎、腱周炎、上腕骨上顆炎(テニス肘等)、筋肉痛、外傷後の腫脹・疼痛
	グリチルリチン酸	グリチルリチン酸ニカリウム点眼のみ																		
	グリチルリチン酸	デルマクリン軟膏	ステロイド様抗炎症作用(浮腫抑制、肉芽腫抑制、抗紅斑)				5%以上あるいは頻度不明(過敏症)												通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価		A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 差用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化									
評価の視点		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意す べき副作用のおそれ	薬理に基づ く習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果					
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	頻度不明:ア ナフィラク シール様状 喘息発作の 誘発(アスピ リン喘息) 接触皮膚炎 光線過敏症	頻度不明(局 所の刺激感、 色素沈着) 0.1~5%未 満(局所の発 疹、発赤、そ う痒感、水 疱・びらん) 0.1%未満 (局所の腫 脹、適用部 の皮膚乾燥)	頻度不明(過 敏症)	本剤又は本剤の 成分に対して過 敏症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(喘 息発作の誘発) チアプロフェン酸、 スプロフェン、フェ ノフィラート及び オキシベンゾンに 対して過敏症の既 往歴(交叉感作性 による過敏症)	気管支喘息、感染 を伴う炎症、高齢 者、妊婦、産婦、授 乳婦等、低出生体 重児、新生児、乳 児、幼児又は小 児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化	原因療法で はなく対症療 法 接触皮膚炎・ 光線過敏症 は使用後数 日から数ヶ月 して発現する ことがある。 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法も考慮	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		症状により適量を1日数回 患部に塗擦する。	下記の疾患なら びに症状の鎮 痛・消炎 変形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱・腱鞘 炎、腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛
ケトプロフェン	メナミン軟膏 後発品なし	急性炎症・持 続性炎症に 対する抗炎症 作用、鎮痛 作用を有する																	
ケトプロフェン	モーラス(貼 付剤)	急性炎症・持 続性炎症に 対する抗炎症 作用、鎮痛 作用を有する					0.1%未満(ア ナフィラク シール様状、 喘息発作の 誘発(アスピ リン喘息) 5%未満、重 特例は頻度 不明(接触皮 膚炎) 頻度不明(光 線過敏症)	0.1~5%未 満(局所の発 疹、発赤、腫 脹、そう痒 感、刺激感、 水疱・びら ん、色素沈 着) 0.1%未満 (皮下出血)		本剤又は本剤の 成分に対して過 敏症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(発 作の誘発) チアプロフェン酸、 スプロフェン、フェ ノフィラート及び オキシベンゾンに 対して過敏症の既 往歴(交叉感作性 による過敏症)	気管支喘息、感染 を伴う炎症、高齢 者、妊婦、産婦、授 乳婦等、低出生体 重児、新生児、乳 児、幼児又は小 児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化 接触皮膚炎・ 光線過敏症 が悪化し、全 身の皮膚炎 症状が拡大 し重篤化	原因療法で はなく対症療 法 接触皮膚炎・ 光線過敏症 は使用後数 日から数ヶ月 して発現する ことがある。 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法		損傷皮膚及び粘 膜、湿疹又は発 疹の部位に對 して刺激がある ので使用しない こと		1日2回患部に貼付する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱・腱鞘 炎、腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛	
ケトプロフェン	セクターロー ション 後発品なし	急性炎症・持 続性炎症に 対する抗炎症 作用、鎮痛 作用を有する					0.1%未満(ア ナフィラク シール様状、 喘息発作の 誘発(アスピ リン喘息) 5%未満、重 特例は頻度 不明(接触皮 膚炎) 頻度不明(光 線過敏症)	0.1~5%未 満(局所の発 疹、発赤、腫 脹、そう痒 感、刺激感、 水疱・びら ん、色素沈 着) 0.1%未満 (適用部の皮 膚乾燥)		本剤又は本剤の 成分に対して過 敏症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(発 作の誘発) チアプロフェン酸、 スプロフェン、フェ ノフィラート及び オキシベンゾンに 対して過敏症の既 往歴(交叉感作性 による過敏症)	気管支喘息、感染 を伴う炎症、高齢 者、妊婦、産婦、授 乳婦等、低出生体 重児、新生児、乳 児、幼児又は小 児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性 化 接触皮膚炎・ 光線過敏症 が悪化し、全 身の皮膚炎 症状が拡大 し重篤化	原因療法で はなく対症療 法 接触皮膚炎・ 光線過敏症 は使用後数 日から数ヶ月 して発現する ことがある。 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法を考慮		表皮が欠損して いる場合に使用 する一過性な 刺激感 眼及び粘膜に 使用しない 密封包装法での 使用はしない		症状により、適量を1日数 回患部に塗布する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節 症、肩関節周 圍炎、腱・腱鞘 炎、腱周囲炎、 上腕骨上顆炎 (テニス肘 等)、筋肉痛、 外傷後の腫 脹・疼痛	
サリチル酸グリコール	配合のみ																		
サリチル酸メチル	サリチル酸 メチル「ミヤ ザワ」 後発品なし							過敏症		本剤過敏症の既 往歴				眼には使用しな い。大量使用に よる頭痛、悪心 嘔吐、食欲不 振、頻脈		5%又はそれ以上の濃度 の液剤、軟膏剤又はリメ ント剤として皮膚局所に塗 布する		下記における 鎮痛・消炎 関節痛、筋肉 痛、打撲、捻挫	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 薬理にお ける	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果
ピロキシカム 軟膏	バキソ軟膏 アラキドン酸 代謝における シクロオキシ ゲナーゼを阻 害し、炎症・ 疼痛に関与 するプロスタ グランジンの 生成を抑制 することによ るものと考え られている。抗炎症作用、鎮痛作用を有する。	併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ) 併用注意	薬理・毒性に 基づくもの 特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの 特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌 慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
フェルピナク 軟膏	ナバゲレン 軟膏 プロスタグラ ンジン生成 抑制作用を 有し、疼痛、 急性炎症、慢 性炎症に対し、鎮痛・抗 炎症作用を 示す。			0.1~1%未 満(そう痒、皮 膚炎、発赤) 0.1%未満(接 触皮膚炎、刺 激感、水疱)		本剤の成分過 敏症の既往歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(発 作の誘発)	気管支喘息、感 染を伴う炎症、妊婦又は妊 娠している可能性のある 婦人、小児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法	表皮が損傷して いる場合に使用 すると一過性の 刺激感 眼及び粘膜に使用 しない 密封包帯法での 使用しない		症状により、適量を1日数 回患部に塗擦する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節症 筋・筋膜性腰 痛症 肩関節周囲炎 腱・腱鞘炎 腱周囲炎 上腕骨上顆炎 (テニス肘等) 筋肉痛 外傷後の腫 脹・疼痛
フェルピナク 貼付剤	セルタッチ プロスタグラ ンジン生成 抑制作用を 有し、疼痛、 急性炎症、慢 性炎症に対し、鎮痛・抗 炎症作用を 示す。			0.1~1%未 満(皮膚炎(発 疹、湿疹を含 む)、そう痒、 発赤、接触皮 膚炎) 0.1%未満(刺 激感) 頻度不明(水 疱)		本剤又は他のフェ ルピナク製剤に対 して過敏症の既往 歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(喘 息発作の誘発)	気管支喘息、感 染を伴う炎症、妊婦又は妊 娠している可能性のある 婦人、小児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法	損傷皮膚及び粘 膜、湿疹又は発 疹の部位に対 して刺激があるので 使用しないこと		1日2回患部に貼付する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節症 筋・筋膜性腰 痛症 肩関節周囲炎 腱・腱鞘炎 腱周囲炎 上腕骨上顆炎 (テニス肘等) 筋肉痛 外傷後の腫 脹・疼痛
フェルピナク ローション	ナバゲレン ローション プロスタグラ ンジン生成 抑制作用を 有し、疼痛、 急性炎症、慢 性炎症に対し、鎮痛・抗 炎症作用を 示す。			0.1~1%未 満(そう痒、皮 膚炎、発赤) 0.1%未満(接 触皮膚炎、刺 激感、水疱)		本剤の成分に対 して過敏症の既往 歴 アスピリン喘息又 はその既往歴(発 作の誘発)	気管支喘息、感 染を伴う炎症、妊婦又は妊 娠している可能性のある 婦人、小児、慢性疾患	感染を伴う炎 症に用いる 場合には感 染症不顕性	原因療法で はなく対症療 法 慢性疾患(変 形性関節症) では薬物療 法以外の療 法	表皮が損傷して いる場合に使用 すると一過性の 刺激感 眼及び粘膜に使用 しない 密封包帯法での 使用しない		症状により、適量を1日数 回患部に塗擦する。	下記疾患並び に症状の鎮 痛・消炎 変形性関節症 筋・筋膜性腰 痛症 肩関節周囲炎 腱・腱鞘炎 腱周囲炎 上腕骨上顆炎 (テニス肘等) 筋肉痛 外傷後の腫 脹・疼痛

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	
			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
局所 刺激 成分	カンフル	カンフル精 後発品の添 付文書を用 いた	カンフル局所刺 激作用を有 し、皮膚に塗 布すると発赤 又は冷感を生 じる					頻度不明(過 敏症)						濃液面へは使用 しない 眼又は眼の周囲 には使用しない		患部に適量を塗布あるい は塗擦する。	下記疾患にお ける局所刺 激、血行の改 善、消炎、鎮 痛、鎮痒 筋肉痛、挫傷、 打撲、捻挫、凍 傷(第1度)、凍 瘡、皮膚そう痒 症	
	テレピン油	なし																
	ハッカ油	内服のみ																
	メントール	内服のみ																
	ユーカリ油	保険薬辞典 にはきよう み、きよう しゅう、着色 用のみある が添付文書 なし																
	トウガラシエ キス	トウガラシチ ンキ エキスがな かったため チンキで代 用した 後発品なし						頻度不明(刺 激感、疼痛)		び爛、創傷皮膚及 び粘膜炎				原液で使用しな い、入浴直後の 使用は避ける 眼又は眼の周囲 に使用しない		①通常、トウガラシチンキ として、10~40%を添加した 液剤、軟膏剤、硬膏剤又 はパップ剤を1日1~数回 局所に塗布する。 ②通常、トウガラシチンキ として、1~4%を添加した 液剤を1日1~数回局所に 塗擦する。	皮膚刺激剤と して下記に用 いる。 ①筋肉痛、凍 瘡、凍傷(第1 度) ②育毛	
	ノニルワニリ ルアミド	なし																
抗 ヒスタ ミン 成分	ジフェニール ミダゾール	なし																
	ジフェンヒドラ ミン	レスタミン コーワ軟膏	アレルゲンを 塗布または皮 内注射したと きに起こる発 赤、膨疹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回塗布 により著明に 抑制される。					頻度不明(過 敏症)						炎症症状が 強い洩出性 の皮膚炎・適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用する。	使用部位・眼の まわりに使用し ない。	通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布また は塗擦する。	蕁麻疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ	

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境 の変化	用法用量	効能効果				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 換るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
マレイン酸ク ロルフェニラ ミン	外用がない のでボララ ミン錠2mgを 使用	抗ヒスタミン 作用	中枢神経抑制剤・アルコ ール・MAO阻害剤・抗コリン作 用を有する薬剤(相互に作用 を増強)、ドロキシドパ、ノル エピネフリン(血圧の異常上 昇)	痙攣・錯乱・ 再生不良性 貧血・無顆粒 球症(頻度不 明)	ショック(頻度 不明)	5%以上又は 頻度不明(鎮 静、神経過 敏、頭痛、焦 燥感、複視、 眩暈、不眠、 めまい、耳 鳴、前庭障 害、多幸症、 情緒不安、ヒ ステリー、振 戦、神経炎、 協調異常、感 覚異常、霧 視、口渇、胸 やけ、食欲不 振、悪心、嘔 吐、腹痛、便 秘、下痢、頻 尿、排尿困 難、尿閉等低 血圧、心悸亢 進、頻脈、期 外収縮、鼻及 び気道の乾 燥、気管分泌 液の粘性化、 喘鳴、鼻閉、 溶血性貧血、 肝機能障害 (AST(GOT)・ ALT(GPT)・ ALPの上昇 等)、悪寒、 発汗異常、疲 労感、胸痛、 月経異常、 0.1%未満 (血小板減 少)、自動車 の運転等危 険を伴う機械 の操作	5%以上又は 頻度不明(過 敏症)	本剤の成分又は 類似化合物に対し 過敏症の既往歴、 緑内障(増悪)、前 立腺肥大等下部 尿路に閉塞性疾 患(増悪)、低出生 体重児・新生児(迎 撃等の重篤な反応 があらわれるおそれ)	眼内圧亢進、甲状 腺機能亢進症、狭 窄性消化性潰瘍、 幽門十二指腸通過 障害、循環器系疾 患、高血圧症、高 齢者、妊婦又は妊 娠している可能性 のある婦人					4-マレイン酸クロルフェニ ラミンとして、通常、成人に は1回2mgを1日1~4回経 口投与する。なお、年齢、 症状により適宜増減する。	じん麻疹、血 管運動性浮 腫、枯草熱、皮 膚疾患に伴う そう痒(湿疹・ 皮膚炎、皮膚 そう痒症、薬 疹)、アレルギー 性鼻炎、 血管運動性鼻 炎、感冒等上 気道炎に伴う しゃみ・鼻汁・ 咳嗽。
血 行 改 善 薬	酢酸トコフェ ロール	ユベラ錠、 外用がない ので経口剤を 使用。	微小循環系 の賦活作用 を有し、末梢 血行を促す。 膜安定化作 用を有し、血 管壁の透過 性や血管抵 抗性を改善す る。			0.1~5%未 満(便秘、胃 部不快感)、 0.1%未満 (下痢)	0.1%未満 (過敏症)						末梢循環障 害や過酸化 脂質の増加 防止の効能 に対して、効 果がないの に月余にわた って漫然と 使用すべき ではない。	錠剤 通常、成人には1回1~2 錠(酢酸トコフェロールとし て、50~100mg)を、1日2 ~3回経口投与する。 なお、年齢、症状により適 宜増減する。	1. ビタミンE欠 乏症の予防及 び治療 2. 末梢循環障 害(間歇性跛行 症、動脈硬化 症、静脈血栓 症、糖尿病性 網膜症、凍
	ニコチン酸ベ ンジル	配合のみ													

外用湿疹・皮膚炎用薬

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化に伴う 使用環境の 変化				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症例の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 に伴う使用 環境の変 化		
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの		使用量に上 限があるもの	適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	用法用量	効能効果
ステロイド 抗炎症成分	吉草酸酢酸 プレドニゾ ロン	リドメックス コフ軟膏・ クリーム・ ローション	局所抗炎症 作用、血管収 縮作用(軟 膏・クリーム、 ローションとも 同等の作用)	・(眼瞼皮膚 への使用時) 眼圧亢進、緑 内障、白内障 (大量又は 長期にわた る広範囲の 使用、密封法 -ODT使用 時)緑内障、 白内障等	軟膏・刺激感 0.17%、毛のう 炎・せつ 0.08%、そう痒 感0.07%、皮 疹の増悪 0.07%、カンジ ダ症0.01%な ど クリーム・刺 激感0.24%、 毛のう炎・せ つ0.21%、皮 疹の増悪 0.21%、そう痒 感0.05%、白 癬症0.03% ローション・1 例(0.09%)に 白癬、皮膚の 真菌症、細菌 感染症及び ウイルス感染 症(密封法- ODTの場合、 起こり易い。) ・長期連用: ざ瘡様発疹、 酒さ様皮膚 炎・口唇皮膚 炎、ステロイ ド皮膚、多毛 及び色素脱 失等、ときに 魚鱗癬様皮 膚変化、一過 性の刺激感、 乾燥 ・(大量又は 長期にわた る広範囲の 使用、密封法 -ODT使用 時)下垂体・ 副腎皮質系 機能の抑制	過敏症	細菌・真菌・スピロ ヘータ・ウイルス皮 膚感染症及び動 物性皮膚疾患(疥 癬、けしらみ等) 【感染症悪化】、本 剤の成分に対し過 敏症の既往歴、鼓 膜に穿孔のある湿 疹性外耳道炎【穿 孔部位の治療の 遅延及び感染の 恐れ】、潰瘍(ペー チエット病は除く)、 第2度深在性以上 の熱傷・凍傷【治 癒の遅延】、原則 禁忌:皮膚感染症 を伴う湿疹・皮膚炎 ・高齢者・妊婦及 び妊娠の可能性 がある婦人・小児 への大量又は長 期にわたる広範囲 の使用を避けるこ と。	おむつ使用	皮膚感染を 伴う湿疹・皮 膚炎に使用 しないこと(適 切な抗菌剤 による治療が 併用)。	使用部位:眼科 用として使用し ないこと。 使用方法:患者 の化粧下、ひげ そり後などに使 用することのな いよう注意す ること。	・大量又は長 期にわたる 広範囲の密 封法(ODT) 等の使用に より、副腎皮 質ステロイ ド剤を全体的 投与した場 合と同様な症 状があらわ れることがあ る。・長期連 用により、ざ 瘡様発疹、酒 さ様皮膚炎・ 口唇皮膚炎 (ほほ、口唇 等に潮紅、丘 疹、腫泡、毛 細血管拡張 を生じる)、ス テロイド皮膚 (皮膚萎縮、 毛細血管拡 張、紫斑)、 多毛及び色 素脱失等が あらわれるこ とがある。ま た、ときに魚 鱗癬様皮膚 変化、一過性 の刺激感、乾 燥があらわ れることがあ る。・大量又 は長期にわ たる広範囲 の使用、密封 法(ODT)に より、下垂 体・副腎皮質 系機能の抑 制、緑内障、 白内障等	通常1日1~数回、適量を 患部に塗布する。なお、症 状により適宜増減する。ま た、症状により密封法を行 う。	湿疹・皮膚炎 群(進行性指 掌角皮症、ピ ダール苔癬を 含む)、 痒疹群(固定じ ん麻疹、ステロ イド皮膚炎を 含む)、 虫さされ、乾 癬、掌蹠膿疱 症
	酢酸プレド ニゾロン	外用はなし (眼軟膏は あり)											

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量	J 効能効果	
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ				薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ				適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
ステロイド抗炎症成分	デキサメタゾン オイラゾンD	局所抗炎症作用・皮膚血管収縮作用 デキサメタゾンはヒドロコルチゾンアセテート、プレドニゾンアセテートと同等の血管収縮作用を示すことが認められている。				頻度不明 (皮膚の真菌症(カンジダ症、白癬等)、細菌感染症(伝染性膿痂疹、毛のう炎等)及びウイルス感染症、長期連用: ざ瘡様発疹、酒さ様皮膚炎・口囲皮膚炎(頬、口囲等に潮紅、丘疹、膿疱、毛細血管拡張)、ステロイド皮膚(皮膚萎縮、毛細血管拡張、紫斑)、多毛、色素脱失、魚鱗癬様皮膚変化、大量・長期: 下垂体・副腎皮質系機能の抑制、後のう白内障、緑内障)	頻度不明 (過敏症)		・細菌・真菌・スピロヘータ・ウイルス皮膚感染症[感染症の悪化] ・本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者[鼓膜の再生を遅らせ、内耳に重篤な感染性疾患を起こすおそれ] ・潰瘍(ペーチェット病は除く)、第2度深在性以上の熱傷・凍傷(創傷治癒を妨げることがある)・高齢者・妊婦及び妊婦の可能性がある婦人への大量又は長期投与、原則禁忌: 皮膚感染症を伴う湿疹・皮膚炎	・小児の大量又は長期にわたる広範囲の密封法(ODT)等の使用(おむつは密封法と同様の作用がある)。	皮膚疾患を伴う湿疹・皮膚炎に使用しないこと(適切な抗菌剤による治療が併用)。	・眼科用として使用しないこと。 ・眼あるいは眼瞼及び粘膜には使用しないこと。 ・本剤は皮膚疾患治療薬であるので、化粧下、ひげそり後などに使用することのないよう注意すること。 ・塗布直後、軽い熱感を生じることがあるが、通常短時間のうちに消失する。 ・長期連用により現れることがある。(ざ瘡様発疹、酒さ様皮膚炎・口囲皮膚炎(頬、口囲等に潮紅、丘疹、膿疱、毛細血管拡張)、ステロイド皮膚(皮膚萎縮、毛細血管拡張、紫斑)、多毛、色素脱失、魚鱗癬様皮膚変化)	通常1日2~3回、適量を患部に塗布する。	・湿疹・皮膚炎群(進行性指掌角皮症、女子顔面黒皮症、ピダール苔癬、放射線皮膚炎、日光皮膚炎を含む) ・皮膚そう痒症 ・虫さされ ・乾癬		
	ヒドロコルチゾン	医薬用はなし(酪酸プロピオン酸塩はあり)														

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 蓋用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	症状の悪化につながるおそれ	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	通常1日1～数回適量を患部に塗布する。	効能効果		
ステロイド抗炎症成分	血管収縮作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ) 併用注意	薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの 特異体質・アレルギー等によるもの	0.1～5%未満(過敏症)	・細菌・真菌・スピロヘータ・ウイルス皮膚感染症、及び動物性皮膚疾患(疥癬、けじらみ等)(感染症及び動物性皮膚疾患症状の悪化) ・小児で大量又は長期にわたる広範囲の密閉法-ODT等の使用、おむつは密閉法と同様の作用があるので注意すること。 ・高齢者への大量又は長期にわたる広範囲の密閉法-ODT等の使用	皮膚疾患を伴う湿疹・皮膚炎に使用しないこと(適切な抗菌剤による治療が併用)。	使用量に上限があるもの 適量使用・誤使用のおそれ 長期使用による健康被害のおそれ	・大量又は長期にわたる広範囲の使用(とくに密閉法-ODT)により、副腎皮質ステロイド剤を全身的投与した場合と同様な症状、線内障、後のう下白内障等の症状、下垂体・副腎皮質系機能の抑制をきたすがあらわれることがある。 ・長期運用により、酒さ様皮膚炎・口囲皮膚炎(ほほ、口囲等に潮紅、腫瘍、丘疹、毛細血管拡張)、ステロイド皮膚(皮膚萎縮、毛細血管拡張、紫斑)、★ざ瘡様疹が、また多毛及び色素脱失等、接触皮膚炎、魚鱗癬様皮膚変化、★乾皮症様皮膚等(大量又は長期にわたる広範囲の使用・密閉法(ODT):下垂体・副腎皮質系機能の抑制)	・小児で大量又は長期にわたる広範囲の密閉法-ODT等の使用、おむつは密閉法と同様の作用があるので注意すること。 ・高齢者への大量又は長期にわたる広範囲の密閉法-ODT等の使用	・使用部位:眼科として角膜、結膜には使用しないこと。 ・使用方法:患者に化粧下、ひげそり後などに使用するのではないよう注意すること。 ・症状改善後は、できるだけ速やかに使用を中止すること。	・大量又は長期にわたる広範囲の使用(とくに密閉法-ODT)により、副腎皮質ステロイド剤を全身的投与した場合と同様な症状、線内障、後のう下白内障等の症状、下垂体・副腎皮質系機能の抑制をきたすがあらわれることがある。 ・長期運用により、酒さ様皮膚炎・口囲皮膚炎(ほほ、口囲等に潮紅、腫瘍、丘疹、毛細血管拡張)、ステロイド皮膚(皮膚萎縮、毛細血管拡張、紫斑)、★ざ瘡様疹が、また多毛及び色素脱失等があらわれることがある。このような症状があらわれた場合には徐々にその使用を差し控え、副腎皮質ステロイドを含有しない薬剤に切り換えること。また接触皮膚炎、魚鱗癬様皮膚変化、まれに乾皮症様皮膚等があらわれることがある。・密閉法-ODTではウイルス感染症が起りやすい。小児の長期・大量使用、または密閉法で発育不全のおそれがある。	・湿疹・皮膚炎群(進行性指掌角皮症、ピダール苔癬、脂漏性皮膚炎を含む)、痒疹群(尋麻疹様苔癬、ストロブリス、固定尋麻疹を含む)、乾癬、掌蹠膿疱症

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景（既往歴、治療状況等） （重篤な副作用につながるおそれ）	F 効能・効果（症状の悪化 につながるおそれ）	G 使用方法（誤使用のおそれ）	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 （投与により障害の 再発・悪化のおそ れ）	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する（適応を 誤るおそれ）	使用方法（誤使用のおそれ）	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌（他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ）	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ		
非 ス テ ロ イ ド 抗 炎 成 分	ウフェナマ ー ト コンベック軟 膏・クリーム	抗炎症作用、 鎮痛作用を 有する。本剤 の抗炎症作 用は副腎を 介さず、炎症 部位に直接 作用するもの であり、膜安 定化及び活 性酸素生成 抑制作用な ど、生体膜と の相互作用 により発揮す るものと考え られる。				・軟膏剤：発 赤117件（0.87%）、刺 激感87件 （0.65%）、そ う痒74件 （0.55%）、丘 疹37件 （0.28%）、灼 熱感29件 （0.22%）等 ・クリーム剤 ：灼熱感9件 （0.70%）、接 触皮膚炎6件 （0.47%）、潮 紅6件 （0.47%）、刺 激感5件 （0.39%）、発 赤3件 （0.23%）、そ う痒3件 （0.23%）等 0.1～5%未 満（刺激感、灼 熱感、皮膚乾 燥） 0.1%未満 （びらん等）		・本剤の成分に 対し過敏症の既往歴		・使用部位：眼科 用として使用しな いこと。			本品の適量を1日数回患 部に塗布または貼布す る。	急性湿疹、慢 性湿疹、脂漏 性湿疹、貨幣 状湿疹 接触皮膚炎、 アトピー皮膚 炎、おむつ皮 膚炎 酒さ様皮膚炎・ 口周皮膚炎 帯状疱疹

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)			G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用		相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化						
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ							
ブフェキサマ ク	アンダーム 軟膏・クリー ム	抗炎症作用 鎮痛作用					・軟膏：発赤 (0.74%)、そう 痒(0.71%)、 刺激感 (0.57%)、丘 疹(0.25%)、 熱感(0.14%) 等 0.1~5%未満 (そう痒、刺 激感、熱感) 0.1%未満 (色素沈着 注、乾燥化、 落屑、乾皮症 様症状) ・クリーム： 刺激感 (2.66%)、発 赤(1.33%)、 乾燥化 (1.00%)、そう 痒(0.85%)、 熱感(0.85%) 等 0.1~5%未満 (刺激感、乾 燥化、そう 痒、熱感、落 屑、色素沈着 注、乾皮症様 症状) ODT法で汗 疹、毛のう 炎、膿皮症	頻度不明(過 敏症)				本剤の成分に対し 過敏症の既往歴					・使用部位：眼科 用として使用しな いこと。 ・長期使用に より色素沈着 が現れること がある					本品の適量を1日1~数回 患部に塗布する。 なお、必要に応じて貼布療 法、密閉法-ODT療法を 行う。	軟膏：急性湿 疹、接触皮膚 炎、アトピー性 皮膚炎、おむ つ皮膚炎、日 光皮膚炎、酒 さ様皮膚炎・口 囲皮膚炎、帯 状疱疹、熱傷 (第I・II度)、皮 膚欠損創 クリーム：急性 湿疹、接触皮 膚炎、アトピー 性皮膚炎、日 光皮膚炎、酒 さ様皮膚炎・口 囲皮膚炎、帯 状疱疹
抗 炎症 成分	クリチルリチ ン酸	クリチルリチ ン酸二カリ ウムの点眼 のみ																					

リスクの程度 の評価		A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
評価の視点		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
グリチルレチン酸	デルマクリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造がハイドロコチソンの化学構造に類似しているところにより推定される。					5%以上又は頻度不明(過敏症)						眼科用として使用しない		通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎
抗ヒスタミン成分	塩酸シフェンヒドラミン	外用はなし ジフェンヒドラミンはあり →レスタミンコーワ軟膏														
	ジフェンヒドラミン	レスタミンコーワ軟膏					頻度不明(過敏症)						眼のまわりに使用しない。		通常、症状により適量を1日数回、患部に塗布または塗擦する。	蕁麻疹、湿疹、小児ストロフルス、皮膚そう痒症、虫さされ